

蘆花会通信

第6号

2023年(令和5年)
12月15日

特定非営利活動法人

蘆花会

編集発行人 佐久間保明
<https://www.rokakai.com/>

残暑のなか蘆花忌の集い開く

七、八月は記録的な猛暑が続きました。その後の残暑のもと恒春園の庭で、九月十六日予定どおり蘆花忌の集いが開かれました。女性史研究家で元東京女学館大学教授の尾形明子氏による、『不如帰』のモデル―渡辺とめ子と大山信子―という題での講演は、一服の清涼剤となりました。

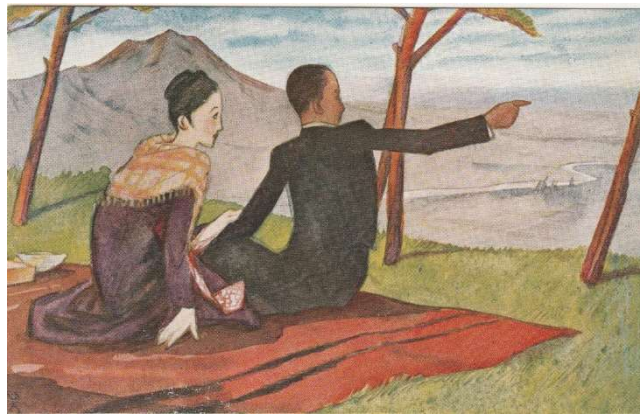
尾形明子氏とえば、『女人芸術の世界―長谷川時雨とその周辺』をはじめ、『自らを欺かず―泡鳴と清子の愛』『華やかな孤独―作家・林芙美子』『評伝宇野千代』『昭和文学の女たち』などの著書で知られる著名な文芸評論家でもあります。

講演はご自身が理事を務める現代女性文化研究所に

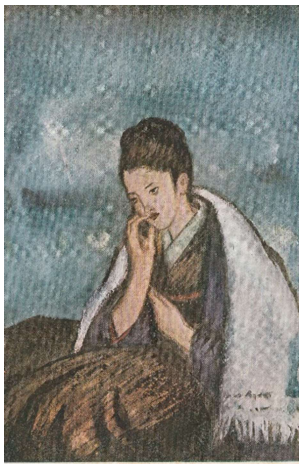
ゆかりの人物である望月百合子さんとの出会いの経験談から始まりました。一般には知られぬ観のある魅力的な女性アナキストについての話は、その伴侶であった石川三四郎の居宅から蘆花の家が見えたという個人誌『ダイナミック』の記事に基づいた話題が文学史家らしい説得力を持ち、聴く人の興味を湧かせました。

演題にある「不如帰」については、望月さんが親しかった竹久夢二に描かせた「不如帰」の絵はがき三枚が披露されました。これは研究者にも知られていない貴重な資料

でしたが、列席者の手元に回覧され、珍しい夢二の作品を身近に確かめることができました。うち人物を描いた二枚を掲げます。



NPO 法人現代女性文化研究所蔵



「不如帰」の話題は尾形氏が招かれたパリの大学での

フランス人の学生相手の講義に続き、そこで学生たちからの要望で「不如帰」の翻訳「NAMIKO」を対象にすることになったことが印象深く語られ、日本文学の海外への広まりの先例として蘆花作品の再確認になりました。

講演は意外な角度から始まり生き生きとした曲折を経て、最後は演題にあったモデル問題に到着しました。明治の頭官たちの家族の一員であった女性が話題となったのち、大正期の女権拡張運動を推進した数種の雑誌が紹介されて、女性史研究家らしい締め括りとなりました。

当日は真夏からの暑熱が衰えぬような残暑のもとでしたが、さすがに恒春園の木々が幸いし、熱中症で倒れる人もありませんでした。参加者は十数名という少数ながら熱心な聴衆により充実した講演会となりました。当日の参加者に厚く御礼申し上げます。(佐久間保明)

「不如帰」の意味

尾形氏の講演終了時には質疑応答の時間を持つことができませんでした。このとき参加者のおひとりから、小説の題である「不如帰」とはどういう意味か、という発言がありました。これは今まででありそうでなかった質問でした。今さら尋ねにくい勇氣ある発声だったと言えます。これは他の人々にとっても興味深いことだと思われるので、ここでもう一度復習してみましよう。

漢語の「不如帰」を訓読すると、下から「帰るに如か不」となります。如という文字は形容詞の「ごとし」の読みが、今では一般的のようですが、それでは意味が通じません。実は、如には「しく」という動詞の読み方があります。これは至る、及ぶ、帰るという意味です。つまり「不如帰」は帰るに及ばないということです。もっと口語的に言う

なら、「帰らなくてよい」となります。ここから小説を見ると、病気を口実に強引に実家に帰らされた浪子について当てはまります。

口の中が赤いゆえに「鳴いて血を吐くほととぎす」と言っている、結核患者にたとえられていたことが背景にありました。そこから、「子規」「時鳥」「杜鵑」という異名ではなく選ばれた熟語と言えます。



梅花書屋での講演会

この質疑応答の直後には別のおひとりが先の質問者に近づき、大変良い質問だっ

たという意味の言葉を投げかけるということがありました。多くの人々の疑問を代弁する質問なので意義深い質疑だったということでしょう。

驚いたことにその人は次に「不如帰」を中国語で発音して中国でのホトトギスについて話し始めました。わたしはそれ以上追跡して詳しい話を聞くことができなかったもので、少し補足します。

もともと「不如帰」というのは、中国語でのホトトギスの鳴き声からきた呼び名でした。初夏に南方から渡ってきて夏の終わりに帰って行く鳥に対して、まだ帰らなくてよい、もっとその鳴き声を聴かせてほしいという気持ちがかこめられた名称でしょう。日本でも古来より和歌に詠まれて親しまれた鳴き声を聞きながらも、鳥の名を知らぬまま聞き過ごしているとしたら残念なことです。

(佐久間保明)

愛子忌の集い

来たる没後七十七年愛子忌の集い(2月17日)では、樺澤眞事氏による「地図情報から見た「みみずのたはごと」の千歳村」という題での講演を予定しています。樺澤氏は蘆花文学に親しみ深く、八年前から蘆花セミナーに参加されていた経歴の持ち主です。会場である愛子夫人居宅の都合により人数制限が行われます。くわしくはホームページをご参照ください。

会報の送付を停止希望の場合はお知らせください。

☎ 090・1618・9659

sakumaxim@ezweb.ne.jp (佐久間)

事務局より

～正会員・賛助会員募集～

【入会金・年会費】

正会員各 1,000円

賛助会員各 500円

【振込先】

三菱UFJ銀行王子駅前支店

特定非営利活動法人蘆花会

普通 0274264